

上の口屋番所（かみのくちやばんしょ）

上の口屋番所は、国の天然記念物に指定されており樹齢約 1000 年と見られる大公孫樹（おおいちよう）の隣にあった。磁器は、佐賀（さが）の町にある城から佐賀藩を治めた鍋島（なべしま）家にとって最も価値ある資産であった。そのため、鍋島家の大名は、有田の内山（うちやま）地区への往来を取り締まるため、江戸（えど）時代（1603～1867）初期に番所を設けた。もともとの建物は現在の位置に対して平行ではなく直角になっていたため、地区を出入りする唯一の道をまたぐ形になっていた。ここには藩の役人が常駐し、地区を出入りする品物や人の流れを監視した。この番所は、有田の町へのあらゆる往来を取り締まった 5 つの番所のうちのひとつであった。

鍋島家を守ろうとしたのは完成品のみではない。近くの泉山（いずみやま）で採れる磁石や地元の職人が持つ知識など、磁器生産に欠かせない資源も藩の機密情報としてすべて厳重に守られた。保安が極めて重要であったため、番所に囲まれた区域の内側に住む人は、同じくその区域の内側出身の人とのみ結婚が許されたと言われている。